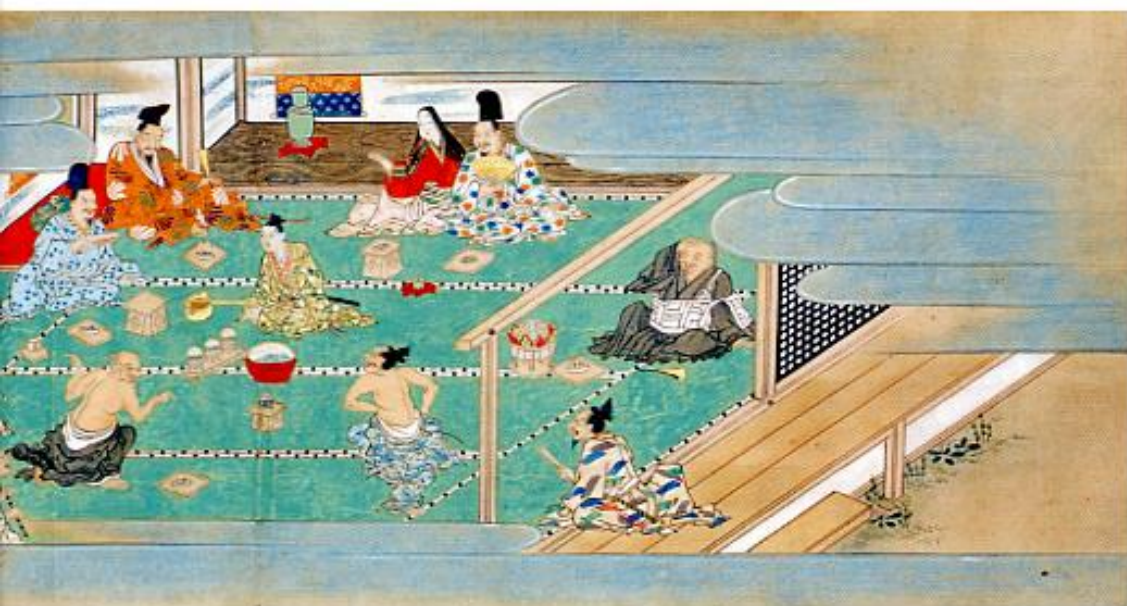


酒飯論絵詞

(三)

造酒長持申様
 酒のいみしき事はむかしも今も事
 ぶりぬ酒をのミ給ふ人々は寿命長久
 故人にあひきやうありて富貴の身
 となり侍るされはにや天神七代地神
 五代のはしめよりみきとてそなへたて
 まつりしより今未代にをよぶ迄も
 諸神にみきをそなへし事めてたく
 わたり侍り後周の礼にも宗廟之祭以
 鬱鬯之酒灌地以降神といはずやしかる
 ときは神もあまくたりたまへるハ酒な
 り古人のことはにいへり使_{しめん}我有_{しんご}二身後
 名_な不_じ如_し即時_じ一杯酒_{いっぱいしゅ}竹林の七賢酒を愛し
 て詩作りわかれをおしむ詩席には三百
 はいときこしける千とせの春のはしめ
 にもまつ李_り花_か春_{はる}を弄_{あそ}ぶ夫婦子孫の
 いはひにもまつ酒をもてよるこひける



(翻刻)

造酒長持申様

酒のいみしき事はむかしも今も事

ぶりぬ酒をのミ給ふ人々は寿命長久

故人にあひきやうありて富貴の身

となり侍るされはにや天神七代地神

五代のはしめよりみきとてそなへたて

まつりしより今未代にをよぶ迄も

諸神にみきをそなへし事めてたく

わたり侍り後周の礼にも宗廟之祭以

鬱鬯之酒灌地以降神といはずやしかる

ときは神もあまくたりたまへるハ酒な

り古人のことはにいへり使_{しめん}我有_{しんご}二身後

名_な不_じ如_し即時_じ一杯酒_{いっぱいしゅ}竹林の七賢酒を愛し

て詩作りわかれをおしむ詩席には三百

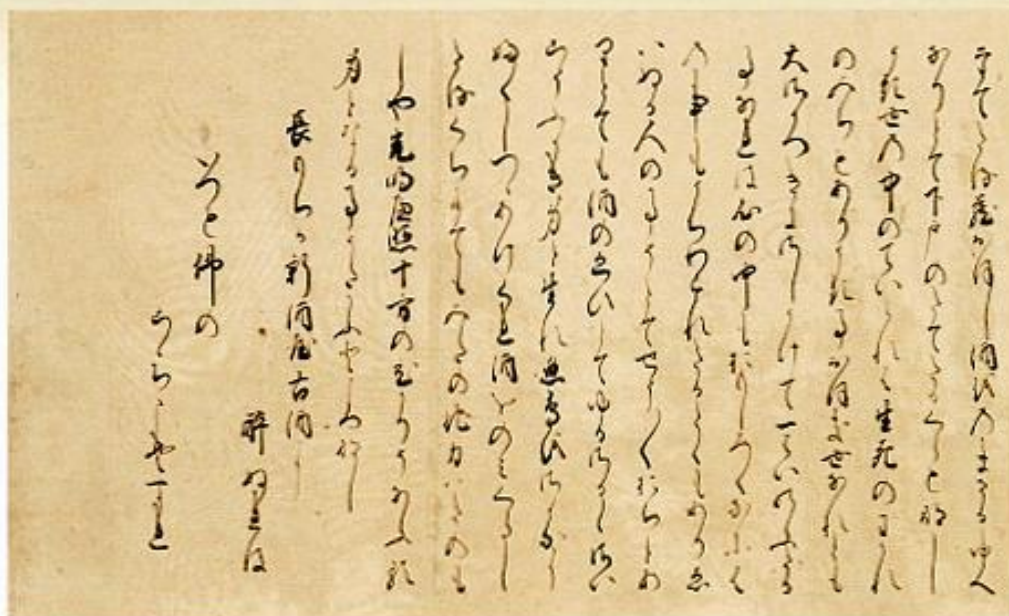
はいときこしける千とせの春のはしめ

にもまつ李_り花_か春_{はる}を弄_{あそ}ぶ夫婦子孫の

いはひにもまつ酒をもてよるこひける

林間に酒をあた、め紅葉をたくといへるも
 威光ありける源氏のおとこなりかほる大将
 の祝言糸竹管絃のやさしきにも酒もり
 してこそ興はあれ 雪月花を詠しても
 酒もりなくて八興あらし 人間のあるし
 あまてる御神へあめか下よりみきあけた
 てまつるにいつれもうけ給ひみやし
 ろあまのいはとへかよひあまり給ふときく
 時ハ酒にましたる物あらし よろつ
 の弄物をと、のへあちハひしも みなさ
 かなとこそ申ける 人ましらひなきけこと
 もか上戸のおろしをさくしつ、おなしこ、
 ろにおもひなし 世にありかほのおかし
 さよ けこのまれ人得たるこそ 系しやく
 なけなるそらはらひ 生れつきたるつら
 くせハ今更いかてなをるへき みるめいと、
 わひしけれ 系いくハにさかふる上戸たち
 金銀みかく座敷にて山海の珍物に国土
 のさかなをならへをき もみちのかハラけ
 まき系のさかつききんくをちりはめ
 僧俗ちこたち入みたれ しひつしあ
 れつ酒もりに下戸なましひにまし
 はりて 大さかつきにおちおそれこ、
 やかしこにか、みあて至極のなんき是





そとて まゆあひしかめかしらをふり
 ひらにゆるさせたまへとて御めんこふ
 たるかほミレはいぬにおハれしさるの
 つらさもあさましきけしきなり 上
 戸の心ハいさきよく 流水の大きかつき
 にさしうけくつ、けのミたきのミなど
 のてからのミもろかたぬいていきほへとも
 酒の興とてゆるされける されハ古人の
 いはれし不老不死のくすり百薬の長と
 のへられしもけによく申つたへたれ
 窮夏きつげの天のあつき日も酒のミぬれハ
 す、しくなり けんとうのあしたにも
 あたゝめ酒をのミぬれハ さなから心うき
 やかになりてそ年ををくりける 上戸の
 たてたる蔵おほし 酒をのまさるゆへ
 なりとて下戸のたてたるくらもなし
 うき世の中のていミレは生死のわかれ
 のみちもあり うき事おほき世なれとも
 大きかつきにさしうけて一はいのふたる
 事なれは心の中もおもしろく なには
 の事もうちわすれたるとくもあり 系

解説

前号は『酒飯論絵詞』の初段を掲載
 しました。今号は二段を紹介します。
 二段の初めの詞書では、上戸じょうこによる
 酒の効用が説かれています。次い
 で絵の部分では、上戸みきのながもちの造酒長持邸
 に訪れた下戸げこの飯室いしむろ律師りつしらが、酒宴
 により泥酔した様子を描いていま
 す。現代語訳は次号に掲載します。

いぬる人の事そとて せうくおちとあ
 りとても酒の系ひとてゆるさるゝさハ
 こそふかき身と生れ魚鳥をさかなに
 ふくしつゝ、あけくれ酒をのミくらし
 たるくちにてみたの他力ハたのも
 しや 光明遍照十方のひかりそなふる
 身となる事うたかふところなし
 長もちが新酒や古酒に

酔ぬれは

いつも佛の

こゝちこそすれ